

イラクのアバーヤについて (その2)

一 民族服飾の形態

古元 千鶴子

I. 緒言

イラク共和国の民族衣服であるアバーヤについて女性用は、前報¹⁾で報告したが、引続き男性の衣服の資料入手時には、1980年9月イラクとイランの紛争が開始され6年の歳月が経過した。早期解決するものと確信し、時機到来を念願したが、未だ終結に至らない。イラク国は、日本人にはビジネスか政府関係の用務以外は、余程の事情がない限り機会是与えられないといつてよいほど入国制限の厳しい国である。戦乱のため更に困難であろうし、民族資料も現段階では容易でないと推察され、今回はイラクの男性用アバーヤ、ディダーシャ、かぶりもの、履物等について、その形態と構成および縫製技法と着装の実態の考察を行なったので報告する。

II. 研究の目的と方法

イラク民族服飾である男性用アバーヤ、ディダーシャの被服構成および技法とかぶりもの、履物等の研究は、私の知る限り解明されていないので、それらを明らかにすることを目的とした。調査方法は、

1. イラク民族の生活背景を理解するため、イラクの文化と生活について文献により調べた。
2. イラクに長期滞在した学識者より資料の提供を受けた。
3. イラク・バクダードの居住者より、男性用アバーヤ、ディダーシャ、かぶりもの、靴等を資料として入手した。
4. アバーヤ、ディダーシャ、かぶりものの形態と、その構成および縫製技法と着装の実態を考察した。

イラク国の概要について前報¹⁾に記載したのでここでは省略する。

III. イラクに於ける歴史服と民族服

1. イラクに於ける民族伝承的な衣服の様式

“Folkloric Fashions in Iraq”の書が、The Ministry of Culture and Information から刊行された、その著者

である Dr. Waleed Mahmoud al-Jadir によれば、イラク史によると、イラク民族は、バビロニアやアッシリアの時代以来、常に衣服の様式に熱烈な関心を示して来ているが、この関心がどんな社会的階級に属していようと、あらゆる人々に及んでいることに触れるのは意義あることであり、イラク民族の衣服様式への関心の持ち方を示す根拠として、我々は古い民族伝承的な衣服が金、銀で縫いとられた絹であったということを挙げねばならない。イラク民族は、彼らの衣服の様式によせる関心の高さ故に、おびただし種類の生産に—それがイラクであれ、他のアラブ、イスラム国家のいづこであれ—通曉することとなった。従って我々はアラブ及びイスラム諸国家の衣服の様式に関して、衣服の形態のみでなく名称に至るまで類似する伝統的、地理的考慮のあることが理解され、これらの名称を挙げそれらの特徴と歴史と、種々な小説や詩の中に出てくる実例を引用しながら言及している。イラクの衣服様式を初期イラク時代から現代に至るまで、文献的に考察し、イラク衣服様式の歴史に関する包括的研究であるが、博士はイラク衣服様式の明細化は、それがイラクの古い社会の総ての領域間での差とか、古い社会と近代市民社会との相互関係を詳らかに調べることを必要とするので、中々困難な研究であると述べられていた。ここに発表する衣服はメソポタミアやバビロニアの王侯貴族の衣服でなく、酷暑の砂漠性乾燥地帯のバクダードを中心とした庶民の男性用民族服飾である。イスラムのさまざまな用語の訳語は日本では、まだ一定の慣用に達しているとは云えないので、原語を尊重し、慣用語、地方の言葉通りにしておく²⁾。

2. 男性用民族服飾の形態および構成

男性の服装は、次の6点から構成されている。

- ①アラキシーン ②シュマーク ③アイガール
 - ④ディダーシャ ⑤アバーヤ ⑥履物(革靴と編靴)
- (1) アバーヤ

BAGHDAD OBSERVER に掲載されたアバーヤ姿である。(写真1) ガウン風のゆったりとした黒無地の



写真1. アバーヤ (男性用)



写真2. デイダーシャ

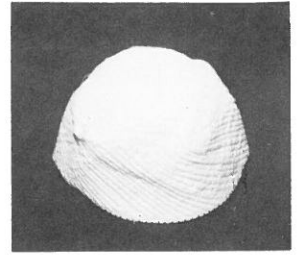


写真3. アラクシーン

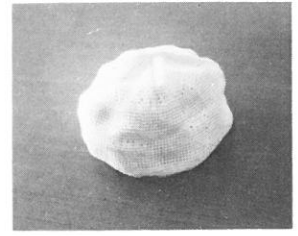


写真4. レース編アラクシーン

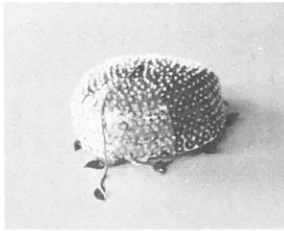


写真5. ダンス用アラクシーン

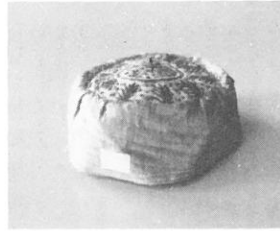


写真6. 外出用アラクシーン

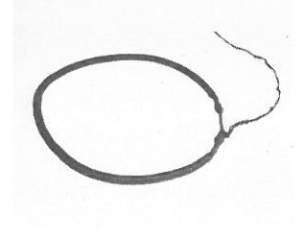


写真7. アイガール

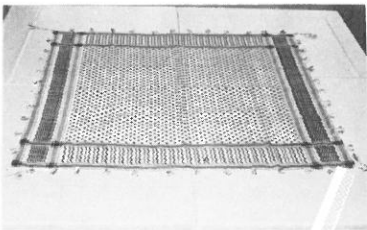


写真8. シュマーク



写真9. アラクシーン・シュマーク・
アイガール



写真10. シュマーク (房飾り)

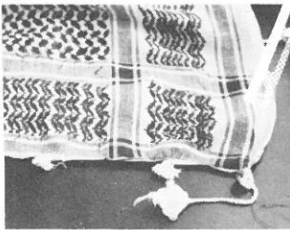


写真11. シュマーク (房括り)

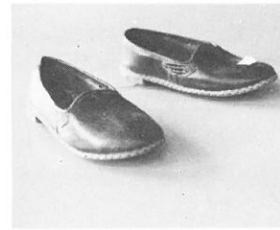


写真12. 革靴



写真13. 編靴

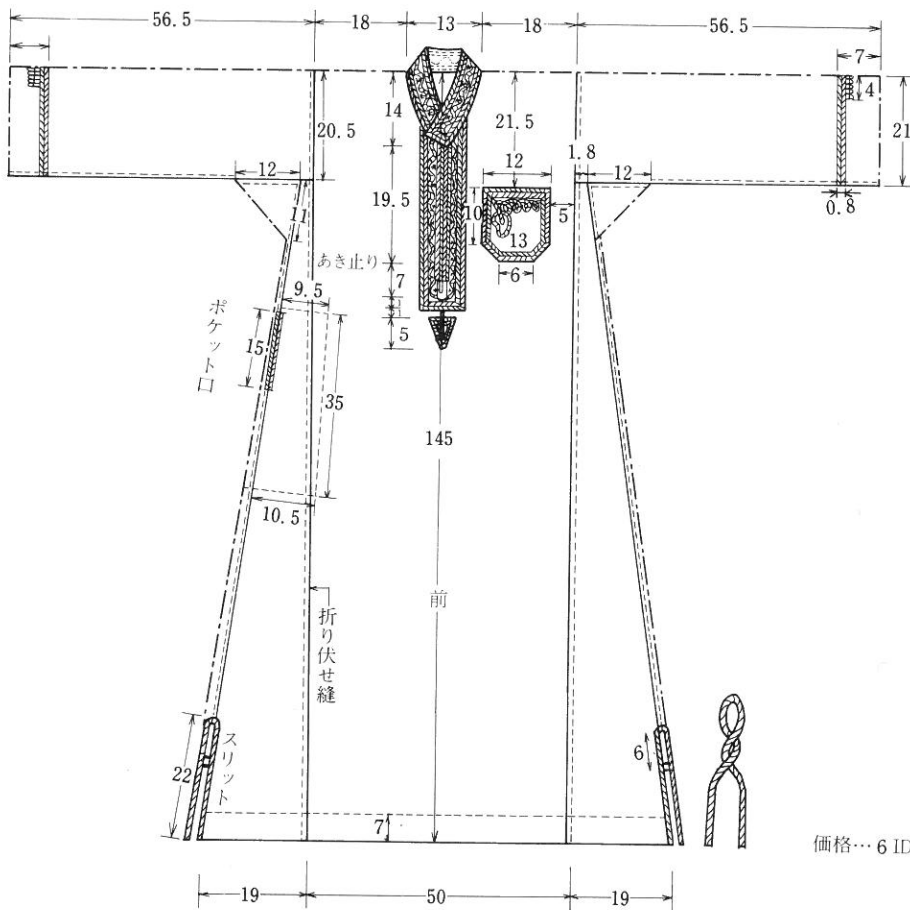
古元千鶴子所蔵

手ざわりよく丈夫である。一総30gであった。総用布は幅74cm長さ526cm内外である。当時価格は7.3ID日本円で1ディナール約800円である。構成原図で理解できるように平面構成で至って単純な縫製である。地縫ミシンは用いていない。①上衣、下衣の縫い合わせは針目1cmのぐし縫いである。②肩は、布の耳端を1.5cmの縫代を裏側に折り、外表に合わせて折り山より0.8cmはいた所を、針目1cmのぐし縫い後に、折り山を0.3cmぐらいの深さでかがり縫いをなし、幅0.6cmの杉綾縁飾りのミシン刺繍をほどこしている。③袖口は1cmの三つ折りに飾り糸で1cmの縫代でぐし縫い後、杉綾模様縁飾りのミシン刺繍をする。④前開き袋状のアパーヤなので、歩きや

すいように4cmの裾上りのため、前打合わせに2cmのつまみを作り、衿元飾りの下より裾迄、1cmの三つ折り、1cmぐし縫い、杉綾縁飾りミシンをかける。⑤衿回りには見返し布をつけ、杉綾模様縁飾りミシンを太くかけ、アラベスク模様飾りの分厚さのミシン刺繍がほどこされている。

(2) ディダーシャ

アパーヤの外衣の下に着用される衣服である。(写真2, 図2, 図3, 参照) 衿は Stand away collar で、袖付、ベルトなし、足首くらい迄の長さで、両脇にスリットのある裾広がりのゆるやかなチュニックである。アパーヤを着用しない場合は、そのまま上衣でもあり、単独でも着



価格… 6 ID

図2. ディダーシャ構成原図 (前)

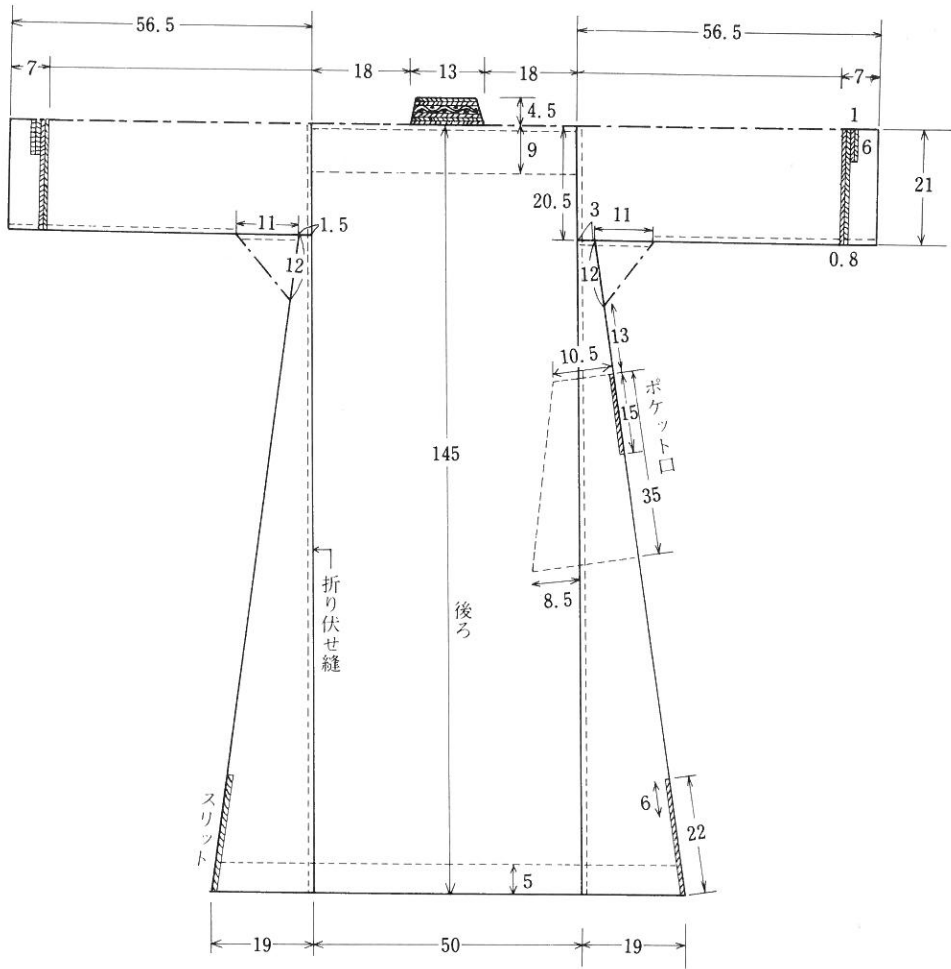
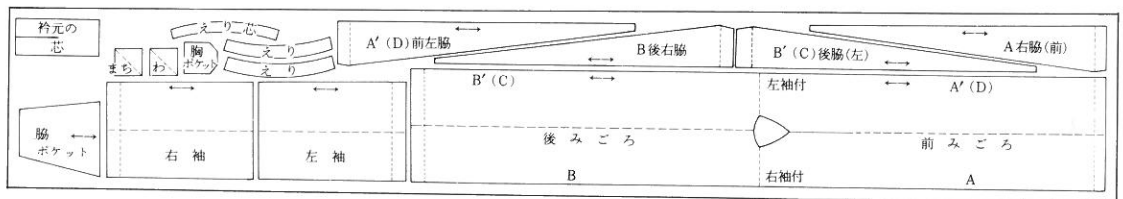


図3. ディダージャ構成原図 (後ろ)

古元千鶴子所蔵



布幅74cm 用尺450cm

図4. ディダージャの裁ち方図

用している。チュニックは古代ローマの男性が着用していたし、ビザンチウム時代のチュニックは、金、銀、宝石などで細工され、6世紀よりブロードなどの絹織物が多く用いられた。ディダーシャはワイシャツとズボン姿の上に着てもよく自由である。衿は首からゆるやかに離れ、前明きは Delrin fastener 付で、衿元がゆったりしている。特徴としては、袖口、胸や脇ポケット口、スリットには、古代ローマにおいて飾りつけられた2本の clavi と呼んだ条飾風の縁飾りがついている。衿と衿前明きには、latus clavus といい幅広いクラブ飾りと条模様をついた衣服である。淡い鶯色の飾り糸であり、飾り糸はアバーヤの衿元飾り糸と同質である。また脇のスリットにも縁飾りをなし、Chinese knot をつけている。古代ローマでは身分、位階を衣服の上にクラブを赤と紫であらわし、議員も着たチュニックであったといわれ、9世紀以後は軍人の階級につけられた肩章、総等もこの類に入る。チュニックは、その時代によって様々な流行を経て来ている。材質は主に白無地の木綿である。所蔵のものはポリエステルと綿の混紡である。アラブ首長国連邦のアブダビでは、真白な絹のディダーシャの手首にはカフスが付き、金のカフスポタンがつくが、白無地の綿や絹の薄地物の生地、絹飾り糸と条飾の分厚さに、材質の異和感と不思議さを与えるが、昔からの埋もれかけたように見える伝統が、民族独得なものとして現在のディダーシャにあらわれている。また材質にはベージュやグレーの無地も着用され、男の子供は同系の形で縞木綿の着用もみられる⁴⁾。

縫製はミシン仕立てである。①肩山は輪であり、後肩のみ白木綿の肩裏がつく。②胸ポケットに条飾、飾り模様をなしポケット付け。③前後中央身ごろと、前後脇布および脇縫は折り伏せ縫いである。④袖口は7cm折り返し、条飾をする。⑤袖下および袖付けは折り伏せ縫いで、手の動作を自由にするため檔がつく。⑥脇ポケット付け後、条飾の縁飾りをする。⑦裾を折り上げミシンをかける。⑧スリットに縁飾りをおね Chinese knot 作りをする。⑨衿と前明きに、共布地の芯を裏打ちし、前に Delrin fastener をつける。衿は4.5cmの出来上り幅に仕立て、衿付け後に衿と前明きと続けて飾り糸で、latus clavus 飾りをなす。張りのあるポリエステルと綿の混紡であるが、比重がやや大で耐摩耗性にすぐれ弾性がよくW&W効果があり、水溶性の汚れがつきにくい上質素材で重量は400gであった。当時価格6IDである。

(図4)は、ディダーシャの裁ち方図で、型紙を配置してみると用尺は、幅74cmで450cm内外である。一般に

ディダーシャを正装した人は、美しい民族衣服姿であり、社交や休養または労働の衣服にもなる。

(3) かぶりもの

かぶりものは、防暑、防寒、防塵、装飾などの目的や、宗教的な理由で頭にのせたり、かぶったりする。昔のように身分や地位を示してはいないようである。

(写真3, 4, 5, 6,)のかぶりものの類をアラキシーンという。写真3は頭にきっちりとはまる綿地の半球型の丸帽である。保護、保温あるいは装飾両用の目的で、2枚の白木綿の布の間に綿を入れ0.8cm幅のミシンステッチしたキルティングの布で帽子を作る。帽子の頂きの部分は幅12×14cmの角ばった楕円形で、まわりの高さは10cm幅のバイヤス仕立てである。縁飾りには黒飾り糸で Blanket stitch をしている。これは汗を抑える効果があるが、南方イラクでは使用しない。価格0.8IDであった。写真4はレース編のもので Cap の高さは15cm、下端の周囲は48cm、価格は1.5IDで女性もかぶることもあるという。写真5はダンス、よろこび用の派手やかな丸帽である。帽子の頂きは14cmの円形布と、高さ6cmのバイヤス縁布回り54cmの白木綿を2枚合せに、0.8cm間隔にミシンをかけた頭型の上に、赤、紫、黄、緑、赤、銀、コバルト、鶯色、銀、緑に色わけし、スパンコールにビーズを載せて飾りつけた crown のかぶりものである。帽子の頂点に長さ16cmの緑のビーズ玉と2cmの赤い葉のついた飾り紐がついている。帽子の縁飾りには、緑色のビーズ28個の中央に赤い葉飾り付きが10ヶ所スカラップ風についている。庶民の色彩豊かなアラキシーンであり、価格は1.4IDであった。写真6はイラク北方のアラキシーンで、よそゆきの Toque 型のかぶりものである。ウズベク共和国にみられる帽子でありチュベティカと同型である。紫の濃淡の配色で、帽子の頂きは直径12cmの円形は赤紫色で、裏打ちをなしウールの飾り糸を用い植物文様で10本の木や葉、実の模様で刺繍をなし、裏には糊止め加工がしてある。円筒の高さは7.5cmで、紫の表綾織地に裏縞ギャバジンの裏打ち布をつけたものに、斜筋状のミシンステッチをかけ、頂き布との接ぎ合わせには10ヶ所にタックがとられている。縁回りは54cmであり、価格は0.35IDである。

(4) フィガール

アバーヤやディダーシャ姿にみられる頭上の黒いワッカをフィガールといい、(写真7)のような形のフィガールを2重の輪にして後でねじり、鉢巻状でとめるものである。後中央の細紐45cmも用いられる。フィガールは円周1m太さは5cmで、真後の細目部分は長さ6cmで2.5cmの太さである。太くて硬く、よくまがり、100gの目

方があった。後の細紐は組紐6本を合わせ、6～9cm間隔の結び目のこぶが5ヶ所にしてある。素材は、獣毛でメリノウールのような良質のものでなく、山羊毛で作られているようである。フィガールが一般の名称らしいが、イキアラともいう。

(5) シュマーク

写真1のアラキシーンの上にふがるものである。

(写真8, 9, 10, 11, 参照)この薄地木綿の柄模様で、黒の模様は一般に使用され、赤い模様はクルド人が多く用いられている。(116×127)の方形の布で、116cmには4cmの房10本と127cm側には12本の房がついている。

四角の隅には15cmの同材質で三つ組で組上げ紐と房がついている。この紐がシュマークをかぶる時に役立つ紐である。

イラク北方のモスールの町は、薄手の毛織物「モスリン」の語源となった所で、古くから織物産業が発達した国であり、現在もこの伝統を受け継ぎ盛んに布を生産し、アラブの人びとが被っている白地に黒や赤の幾何学模様の紋織物が、バクダード周辺で織られている。

このシュマークは三角形に折り対角線を額に当て、フィガールでとめ、後頭部から背中と両肩に垂らす。フィガールの細紐は後中央で垂らす。このシュマークは200gの目方で価格1.5IDである。シュマークの特徴として、写真10は一般イラク人の房飾りであり、写真11はクルド人の房括りである。

(6) 靴

(写真12, 13, 参照)このような靴は街にはなく、田舎の村で求めたものである。写真12は Slip-on shoes 型で、紐結びや金具等がなく簡単に足がすべりこんでいけ、甲が深く、足がすっぽり包まれ安全性がよく歩きやすく、脱げにくい。甲皮と腰皮が内側と外側の真横で、共当革で0.7cmの針目で地縫してある。分厚い底と踵がついていて、ふまずしん等は用いらていない。中底は薄く甲皮と革底との縫い合わせは手縫目が見える頑丈な茶色の牛革製で、踵付けには釘が打ってある。価格2.4IDである。写真13の編靴は酷暑向で女性が主に用いられているが、男女共用である。革靴の文数は28cmあったが、編靴は26.5cm横幅10cmの革底寸法である。綿織物用太糸で白とブルーの緯縞模様を、腰の部分の後は7cm前4.5cm幅で、鉤針の裏アフガン風の編方であり、甲の部分は畳表風に編

まれていて、甲は深く柔軟で伸縮性がある。底には1cmの革製で手縫い靴であり裏打もなく踵もないがはきやすい。価格2.0IDである。

(7) かぶりものの形態

イラクの代表的なかぶりものの形態を写真で示すと次の通りである。(写真14から37参照)

写真14, 15, 16, のかぶり方をアグールという。

写真17, 18, 19, をラーベス・アグールと称し、男性が嫁取りして中年より年寄りに多くみられる姿である。

写真20, 21, 22, をラーヘと呼び若物が暑さを遮蔽するためにこのようにかぶる。若物の粋なかぶり方である。

写真23, 24, 25, は主に労働する時に用いる。ラーヘ・アサーベという。

写真26, 27, 28, はバフ・ヌグ、また泥棒かぶりともいう。強風、砂嵐「赤いジグラ」時にかぶる。クルド人に多く用いられ、ゲリラにもかぶる。

写真29から、写真37までは、クルド人のかぶり方である。半月型のアラキシーンをかぶり、シュマークをかぶる過程である。シュマークのかぶり方は、遺跡調査に参加した方である。フィガールを用いない5形態と、クルド人の主なかぶり方である。パキスタン、アフガニスタン、インドのように布を厚くし巻き上げた布巻帽子の姿はみられなかった。

その他(写真38)は、ハザムという一種のベルトで、写真1のアーヤの下に着用する衣服に用いる地方もある。絹のハザムは1mの長さで房飾り20cmあり、また3cm幅で毛の組紐風の長さ120cm、3本の房飾り25cmのおさえ紐等がある。(写真39)は、糸紡ぎ用に用いる紡錘車である。アンデス、トルコの羊毛紡ぎと、アフリカのトーゴの綿紡ぎと同系であり、紡垂棒は30cm、独楽の直径5cmである。紡垂棒の上の切り込みから、繊維を引伸ばして、紡錘車で撚りをかけて糸を紡いでゆく。価格0.25IDである。

(写真40から写真60)までは、イラクの方々の好意による。シュマークの扱い方を寒い時は、垂れ布を口に当てマスクの用をなし、砂嵐には顔面をおう役目等、何気なくかぶっている姿から生活観を反映する民族のかぶりものとして、シュマークの機能をもつ形状が更に会得され得難い貴重なものとなった。イラク国は写真撮影を好まないお国柄である。



写真14. アゲール



写真15. アゲール

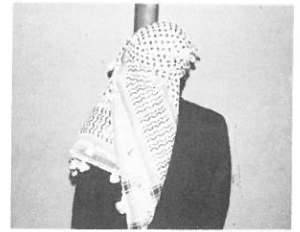


写真16. アゲール



写真17. ラーベス・アゲール



写真18. ラーベス・アゲール



写真19. ラーベス・アゲール



写真20. ラーヘ



写真21. ラーヘ



写真22. ラーヘ



写真23. ラーヘ・アサーベ



写真24. ラーヘ・アサーベ



写真25. ラーヘ・アサーベ



写真26. バフ・ヌーグ



写真27. バフ・ヌーグ



写真28. バフ・ヌーグ

かぶりものの形態 (1-1)



写真29. シュマークの巻き方

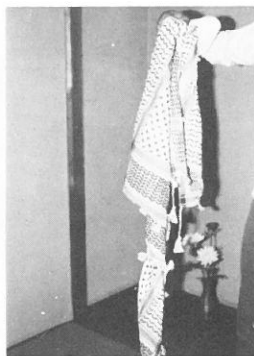


写真30. シュマークを手に



写真31. 額にあてる



写真32. 前で交差



写真33. 後より右に差し込む



写真34. 右側に垂らす



写真35. 白アラキシーンと後姿



写真36. 後紐房を前で止める



写真37. 後姿

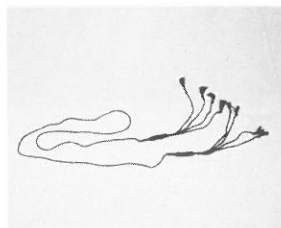


写真38. ハザム

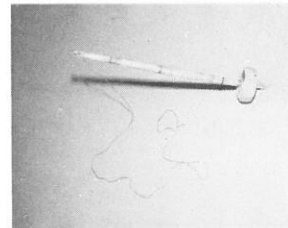


写真39. スピンドル・ホワール

かぶりものの形態(1-2)

古元千鶴子所蔵



写真40.



写真41.



写真42.



写真43.



写真44.



写真45.



写真46.



写真47.



写真48.



写真49.



写真50.



写真51.



写真52.



写真53.



写真54.

バグダードの人々のかぶりものの形態(2-1)



写真55.



写真56.



写真57.



写真58.



写真59.



写真60.

古元千鶴子所蔵

バグダードの人々のかぶりものの形態(2-2)

IV. 総括

イラクの文化、芸術省刊行物として、1970年 Dar Al Azia(House of Iraqi costumes) が建設され古代文化の伝統をふまえた衣裳がある。冊子にはバビロンの偉大な王ハムラビの石碑から得た衣裳、サマワ刺繍地で作られた衣裳、13世紀の彩飾画から得たもの、アラビア文字から得た衣裳、“千一夜物語り”からヒントを得たもの、職人の織った古い布を再現したもの、民間説話風のもの等に見られるのは見事である。1986年11月22日NHKワールド、ネットワークとしてイラクからの報告があったが、戦争中といえ、バグダードの街並の男性は西欧諸国風の姿にまばらに見える民族衣服と古代メソポタミアのファッションが開催され、バビロンを誇りとしているという。イラクの民族の生活する気候風土に順応して、自然発生的に形成され、民族のもつ文化に適応し展開成長した民族独得の服飾を伝承してきている一場面をたづね求めた。イラクの男性庶民の服飾形態は各項目で考察したが平面的構成をもち、装飾化せず単純にして質素で実

用的なイラクの一民族の男性の特異な衣服の形態が理解され意義深さを与えられた。イラクの民族衣裳は、イラク国を大きくモースル地方、バグダード、スレマニア(クルド)と三分され、それぞれ異なった衣裳がある。民族衣服は時代の変遷とともにその姿を変えてゆく。現在文明のなかで先進文化国家の服飾が世界各地に浸透し、固有の民族服飾は次第に消滅しようとしているので民族服飾についての調査収集と研究が急務である。イラク国は「豊かな過去をもつ国」でありイラクの方々は、民族文化財を守り、愛し、民族としての無事息災を祈らずにはおられない。

本論文を執筆するに際し、現地に関する有益な、ご助言を頂いた方、アバーヤその他イラク民族服飾の資料をご提供戴きました小川満司、道子ご夫妻、戦乱のため着装の実態については出宮一徳教授、ならびにイラクの方々のご協力に深く感謝申し上げます。

本論文は1980年10月、1981年9月、日本家政学会民族服飾部会総会において発表を行なったものである。

文 献

- 1) 古元千鶴子：イラクのアバーヤについて一民族服飾の形態，岡山県立短期大学研究紀要，24，29～38（1980）
- 2) 日本イスラム協会：イスラム事典，平凡社，東京（1985）
- 3) 小川英雄その他：世界の国イラン・イラク・アラビア，講談社，P39（1978）
- 4) 梅棹忠夫，大丸弘：民族の暮らし1．着る飾る，日本交通公社出版事業局（1982）

昭和61年11月29日受理